

「遊び」は「学び」 大人になった私を助けるのは、子どものころの私

NPO法人インフイーニティー理事長 野口 美砂子



生まれ故郷・奈留島

遠い昔の夕暮れ、

「みゃー、ご飯よー」

と、遠くから母の呼ぶ声がします。

豊かな自然に囲まれた五島列島。そのまんなか位置する奈留島で生まれ育ちました。

子どもの頃の遊び場といえば、山、海、川。

秘密基地作りや磯遊び、仲間との陣取り合戦やごっこ遊び、膝は擦り傷だらけで、穴が開いたボケツトの中には、石けり用の石。山にはご馳走がたくさんありました。野いちごに桑の実、ヤマモモ、ヤマブドウ…。口の周りを紫色にして帰ってくる私を見て、母はいつも笑っていましたね。

そして、真っ赤な夕日が水平線に沈む頃、母の呼ぶ声で遊びは終了です。「またねー」で、夕飯が待つ家へと一目散に走って帰る小さい頃の私でした。

感性は知性の基盤

起き上がれない…



土台（感性）がしっかりしていない状態で早期に文明的要素（知性）を詰め込んだり、抑圧をかけると…。

起き上がりこぼし



たくさんの不思議に会い、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わう…五感を駆使してたくさん感じる。

プロフィール

- 国家資格キャリア・コンサルタント
 - 子育て支援コーディネーター
 - 利用者支援専門員
 - 保育士
- 五島の奈留島生まれ。幼稚園、保育所勤務を経て、NPO法人インフイーニティーを設立。現在、子育て支援コーディネーター、キャリアコンサルタントとして多くの方々の相談を受ける中で、乳幼児期の親子の関わり方や学童期の経験がそれぞれの自己概念に直接結び付いていることに気づき、「遊び」の重要性を実感している。

人と人の「間」を形成

例えば「ごっこ遊び」にはルールがあります。このルールは皆が守らなければ成立しません。時々、ルールを理解できない小さい子が入ってきたりします。そうすると、小さい子も楽しめるように大きい子が話し合ったり、世話したりルールを変えたりもします。時間が経つのも忘れるくらい夢中になっていても、ずっと続くわけではありません。終わりの時間になるとおしまい。「またね」で終わるのです。ときには喧嘩し、どうしたら仲直りできるかと悩むこともあるでしょう。こうして、社会の秩序や、関わり方、思いやり、問題解決など、人として生きていく上で大切なもの、人と人との「間」を体得しながら身に付け「人間」になつていくものなのですが、現在の子どもたちの環境は、仲間と同じ時

間と同じ空間で過ごす「遊び」がなくなりつつあります。

遊びながら学ぶ経験が少ないため、転んでも心が立ち上がることができないこともあるようです。

三つ心 六つ躰 九つ言葉 文十二 理十五で決まる

これは、明治生まれの曾祖母から教わった稚児の段階的養育の順番です。三つ（三歳）までに心ができて、六つ（六歳）までに生きていく上で大切なことを真似しながら所作を身に付け、九つ（九歳）までにたくさんの友達、地域の大人と関わる中でコミュニケーション力が身に付き、十二歳までに自分の考えを文字に表現でき、十五歳までに世の中の道理を理解すると、立派な大人になるということです。だからこそ「三」が付く（九つ）までは、たく

大人はかつて子どもだった

さんの大人のまなざしの中で安心して「食べる、寝る、遊ぶ」を保障してあげることが大事なのです。

子どもの頃はたくさんの不思議に出会い、見る、聞く、触れる、嗅ぐ、味わう…五感を駆使してたくさん感じ、試み、失敗もしました。毎日の繰り返しの中で自然を畏敬し、少しずつ大人になったのです。かつて子どもだった私たち大人は、失敗して身に付けたことを忘れて、こっちの道より、あっちの道の方が安全だと教えたいと思うのです。しかし失敗を喜び見守ることで、子どもは遊びの中で何かに出会い、体験し、新しいことを身に付けていくのです。

教えるべきか、見守るべきか。さあ、どうしましょうか。

ひとくちメモ

ロバート・フルガム著書『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』のエッセイ集の中に

…人間、どう生きるか、どのようにふるまい、どのような気持ちで日々を送ればいいのか、本当に知っていなくてならないことを、私は全部残らず幼稚園で教わった。人生の知恵は大学院という山のでっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっている。

何でもみんなで分け合うこと、するをしないこと、人をぶたないこと、使ったものは必ずもとのところに戻すこと、誰か傷つけたら「ごめんなさい」と言うこと、不思議だなと思う気持ちを大切にすることなどが書かれています。